九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

有馬学･マイケル= ピアソン・福本寛・田中直樹・菊畑茂久馬著『山本作兵衛と日本の近代』

宮地, 英敏
九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1515784

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 30, pp.167-171, 2015-03-20. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【書評】有馬学・マイケル＝ピアソン・福本寛・田中直樹・菊畑茂久馬著『山本作兵衛と日本の近代』

宮地英敏

本書は、二〇一二年十一月十七日に福岡ユネスコ協会によって開催されたセミナー「山本作兵衛と日本の近代」（会場・レソラＮＴＴ夢天神ホール）の報告をもとにしつつ、当日のセミナーで議長および総括を務めた有馬学の『中央公論』二〇一一年九月号の論稿なども加えて、加筆修正して一冊にまとめあげられ出版されたものである。

目次は左記の通りである。

口絵（山本作兵衛コレクションから）
消滅した〈近代〉と記憶遺産―いま作兵衛画の何を問題にすべきか―（有馬学）
Ⅰ　炭坑＝ヤマのすべてを見届けた人
山本作兵衛―世界記憶遺産と世界遺産をつなぐもの―（マイケル＝ピアソン）
山本作兵衛炭坑記録画から見た筑豊炭田（福本寛）
山本作兵衛作品と筑豊地域社会（田中直樹）
山本作兵衛の絵を読み解く（菊畑茂久馬）
Ⅱ　山本作兵衛はなぜ絵を描いたのか
討議（マイケル＝ピアソン・福本寛・田中直樹・菊畑茂久馬・有馬学）
作兵衛さんの絵は記録かアートか
筑豊の生産構造が見えてくる
絵と文字による幻想的記録画
作兵衛作品をどう長生きさせるか
結びにかえて―〈方法〉としての山本作兵衛（有馬学）

口絵は、二〇一三年一〇月～一一月に田川市石炭・歴史博物館開館三〇周年記念特別原画展に展示された中から、墨画九点、カラー水彩画一四点、自筆原稿や画材などが掲載されている。特に、同じ構図の作品

で墨画とカラー水彩画があるものが並置されているため、それらの雰囲気の差異を看取できる。マイケル＝ピアソンによって後述されるが、炭坑という真っ暗な空間の中を、墨画として白黒で描くということと、水彩画としてカラーで描くということは、それぞれが独自の意味合いを持っている。それを視覚的に確認することができる。また、山本作兵衛の画材の簡素さを見るにつけても、まさに普通の民衆の中から湧き上がってきた世界記憶遺産であるということが強く伝わってくる。

口絵に続いて、山本作兵衛の作品群が世界記憶遺産に登録されたことを記念する、有馬学の簡単な紹介文が載せられている。世界記憶遺産への登録の過程や、山本作兵衛の略歴、昨今の産業遺産への社会的関心の高まりなどが紹介された。またそれとともに、元田川市立図書館長の永末十四雄、作家の上野英信、現代美術家の菊畑茂久馬といった山本作兵衛に影響を与えた人物たちや、軍艦島クルーズ、熊谷博子のドキュメンタリー映画『三池　終わらない炭鉱（やま）の物語』など、いくつかの炭鉱にまつわるエピソードがペダンティックに並べられた。

続く「山本作兵衛―世界記憶遺産と世界遺産をつなぐもの―」を担当したマイケル＝ピアソンは、オーストラリアの首都にあるキャンベラ大学文化遺産学部の准教授であるとともに、世界遺産コンサルタントとして世界遺産・世界記憶遺産の登録の手助けを行っている人物でもあり、山本作兵衛の作品や日記が日本初の世界記憶遺産に登録された際にも尽力した人物である。その当事者による、現場からの説明が行われている。具体的には、世界遺産と世界記憶遺産の違いについて、世界遺産が「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称、世界遺産条約）という国際条約に基づいて認定されているのに対して、世界記憶遺産はユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の事業として行われていることが明示された。もともと、筑豊の炭鉱遺産を産業遺産の一つとして世界遺産へ登録することが目指されていたが、炭鉱の遺産群の残存状況が十二分ではなかった。そのような中で、田川市石炭・歴史博物館の安蘇龍生館長、福岡県立大学の森山沽一教授やＩ・Ｓ・ゲイル教授らとともに、山本作兵衛の炭鉱画を世界記憶遺産へと登録するよう方針転換して尽力した様子が説明された。

また、世界記憶遺産への登録には各種の基準が存在するが、山本作兵衛の炭鉱画については、そのうちで「時代性」「場所」「人々」「様式」という四つの基準を満たしているとされた。「時代性」は、一九世紀後半から二〇世紀初頭の近代日本の炭鉱業において、炭鉱技術・炭鉱社会・炭鉱文化がどのように変化したのを記述しているという点が評価された。特に炭鉱技術では、先山後山の男女ペアからの労働の変化、舟運から鉄道へという輸送の変化などが着目された。「場所」は筑豊である。一農村に過ぎなかった筑豊が大産炭地へと移り変わっていくことで、煙突や鉄道、ボタ山や炭住といった、独自の景観が作られていった姿が描かれている点が評価された。「人々」という点では、労働の在り方や労働条件、労働争議や懲罰といった側面だけに限らず、子ども達の遊びや伝統的な文化行事まで描かれていることが評価された。特に、筑豊の外から集まった人々がそれぞれの慣習・伝統・迷信を持ち込み、筑豊でそれらが融合して育まれていった様子が看取された。「様式」としては、山本作兵衛という一労働者自らが、共同体の内部からの視線で記録を残した点が評価された。自分の人生を絵に書き込む様式が、ヨーロッパなどの外から観察する画家達との違いで注目されたのである。

「山本作兵衛炭坑記録画から見た筑豊炭田」は、山本作兵衛の炭鉱画を所蔵する田川市石炭・歴史博物館の福本寛による作品群の紹介である。山本作兵衛の炭鉱画が世界記憶遺産として高く評価された理由の一つでもあるが、絵としての描写とともに余白に書かれた説明文によって、それらが相互補完的に場面の情報を伝えていることが指摘される。山本作兵衛の視覚的なイメージと、その具体的な解説とによって、当時の炭鉱の様子を詳細にとらえることが出来るのである。例えば石炭の採掘技術は、地中の一部を柱として残していく残柱法から、柱などを残さずにコールカッターで一帯を採掘して後からそこを充填する長壁法へと転換しているが、その変化を看取することが出来る。坑内運搬におけるスラの利用から捲上機の利用への変化であるとか、排水ポンプの蒸気と電気の違いであるとか、鍛冶工の経験を持つ山本作兵衛ならではの詳細な描写について説明された。その他にも、風呂場や劇場や神社といった炭住の生活であるとか、ガス爆発や炭塵爆発といった事故、坑内の死霊の案内といったものについても紹介されている。

また経済史的に重要な点としては、これまで筑豊の炭鉱には見られないと指摘されてきた友子制度について、別子銅山の坑夫によって筑豊にも持ち込まれていた様子が描かれていた点が指摘される。一九世紀から二〇世紀初頭にかけての筑豊の炭鉱における坑夫管理は、親分が炭鉱から仕事を請け負って子分たちを働かせるという、納屋制度といわれる形態であったことが良く知られている。しかし、山本作兵衛の炭鉱画の中には、「伊予の銅山から多数移動」してきている「金山（カナヤマ）」という納屋があったという記述があるというのである。確かに、筑豊に数多あった納屋の一つが友子制度の論理で運営されていたとしても不思議ではない。また矛盾もない。今後の経済史研究の課題として、筑豊にみられた友子制度の納屋が、ある種独特の役割を担っていたのか、それとも単に親分-子分関係の在り方の一つに過ぎないのか、それらの点を解明して行くことが求められているであろう。

「山本作兵衛作品と筑豊地域社会」では、経済史研究者である田中直樹が、筑豊地方の戦前と戦後の成長と衰退を踏まえつつ、地域社会についての分析と提言を行っている。明治中期における選定坑区制と海軍予備炭田の開放が、筑豊の石炭産業が発展する始まりであった。三井・三菱・古河・住友といった中央資本が進出し、安川・貝島・麻生といった地元有力資本と拮抗しつつ展開した。さらには筑豊興業鉄道によって輸送量は飛躍的に増大し、門司港からは海外輸出も行われた。こうして筑豊は、三池や八幡とともに日本の産業化を支える九州の核となったのである。このような成長と発展の中で、大規模資本と零細資本との二重構造であるとか、労働者の激しい移動率を下げるための一山一家主義であるとか、種々の問題を解決するための暴力装置の利用であるとか、負の側面もまた多々内包していたことが指摘されている。

ところが戦後にいたると、高度経済成長に伴う生活革命と並行して、石炭から石油へというエネルギー革命が発生した。その交代劇はドラスティックであり、わずか十四-五年で日本の石炭産業を崩壊させた様子が語られる。理念なき石炭合理化政策の下で、筑豊をはじめとした産炭地はただただ疲弊をしていくこととなったのである。このような状況下、筑豊では企業丸抱えの伝統から「生活ただ乗り意識」が蔓延り、いつしか転化して、援助・補助が無い限り地域の社会生活が成立しえない構造が出来てしまったと指摘される。筑豊から創造と自助を奪ったのである。

その流れの中で、日本の近代化を支えた筑豊の産業遺産や文書群も多くが消失していった。田中直樹は、筑豊の衰退の側面だけではなく、地域の発展と成長の歴史をも記録として残していくことが、明日への展望を開く第一歩であると述べている。

「山本作兵衛の絵を読み解く」は、上野英信が「作兵衛・茂久兵衛どこまで行っても二人旅」と戯れ歌を作ったこともある、画家であり一番弟子でもある菊畑茂久馬の回顧談である。前衛芸術グループである九州派の中心メンバーとして活躍していた菊畑茂久馬は、一九六四年に、福岡市六本松から鞍手町に転居した上野英信に呼ばれて訪問した。そこには粗末なスケッチブックが二〇－三〇冊もあり、めくっていくと、墨一色で何やら闇にうごめく裸の人間の姿が現れ、絵の隙間には文字がびっしり呪文のように書かれていたという。これが菊畑茂久馬と山本作兵衛の炭鉱画との出会いであった。前年には有志の自費出版により『明治・大正炭坑絵巻』が、三年後の一九六七年には講談社から『画文集　炭鉱に生きる　地の底の人生記録』がそれぞれ刊行されている。しかしそこでの山本作兵衛の炭鉱画の評価は、あくまでも炭鉱の記録としてのものであり、絵画としての評価ではなかった。直接に山本作兵衛の大量の作品群を眼にした菊畑茂久馬にとって、この評価は大いに不満であり、画家としての山本作兵衛の意義を説いて回ることに尽力していく。その一方で、山本作兵衛の作品に衝撃を受けた菊畑茂久馬は、自身の創作活動ではスランプに陥ってしまった。彼の代表作となる「天動説」を含め、再び個展を開くことが出来たのは一九八三年のことであった。なんと一九年間も自身を総括しながら雌伏のときを過ごしたためであった。そのような一番弟子からの弔辞ともいうべき回顧談であった。

そして、以上の五名による討議が掲載されている。論点が色々と提示されているが、特に、山本作兵衛の作品を記録として重視するのか芸術として重視するのかという点については、マイケル＝ピアソンと菊畑茂久馬との間での見解の相違が強かった。また、山本作兵衛の描く世界は、麻生系の炭鉱以外は全て中小炭鉱であり、筑豊の炭鉱社会とはいっても偏りが見られることを田中直樹は強調したが、他の四人はそのような経済史的な位置付けが余り理解できないようであった。議長役の有馬学は炭鉱画の保存について述べたものの、他の論者を巻き込んだ話とはならなかった。全体として、すれ違いの多い討議となってしまったようである。

最後に有馬学「結びにかえて――〈方法〉としての山本作兵衛」では、従来は負の側面として捉えられることが多かった炭鉱を、「肯定」として捉えなおすことの重要性が説かれて、結びとされた。

以上のように、本書を簡単に紹介してきたが、最後に書評としてのコメントを付しておきたい。五人の執筆者による合作となっている本書であるが、テーマが山本作兵衛の炭鉱画の世界記憶遺産への登録という話題と、山本作兵衛が炭鉱画に描いた時代と、山本作兵衛が炭鉱画に描いた筑豊という地域と、論点が三つに亘っている。そのためもあって、十九世紀の筑豊の開発の時代、二〇世紀前半の筑豊の隆盛の時代、二〇世紀後半の筑豊の衰退の時代、そして再び脚光を浴び始めた現代と、時代が広範にわたっている。この長い時間の叙述として、マルセル＝プルーストの小説のように過去と現代とを行き来し、また過去と過去の関係もその時代順序が複雑に入り組んで叙述がなされるが、これが読者として

は非常に読み難い。田中直樹と菊畑茂久馬は時代の整理に成功しているが、それ以外の執筆者の章においても、時代を順序だてて再整理をした叙述が行われていれば、より読者に対して親切であったであろう。

また、本書中には〈近代〉〈石炭〉〈炭坑〉等、大量の、読者にとって何を意味しているのか不明なヤマ括弧付きの単語が登場する。一般的に使用されている意味合いとは異なった意味合いで用いているというならば、それを別の言葉で置き換え付け加えて丁寧に説明することこそが、読者に対して何かを伝えるという行為ではないであろうか。多用されるヤマ括弧付きの言葉の群れは、言語によるコミュニケーションを放棄してしまっているといえよう。山本作兵衛の炭鉱画に興味を持った多くの読者に対して、少々不親切ではなかったであろうか。

本書において経済史的に最も大きな論点となる個所は、福本寛の箇所にて先述したように、従来は筑豊の炭鉱では見られないとされてきた友子制度が、山本作兵衛の炭鉱画に描かれていた点である。この点について、炭鉱を対象とした労働史研究の専門家である田中直樹による評価・分析が載せられていないのは残念であった。シンポジウムの場等ではやり取りがあったのかも知れないが、仮説的なものであっても良いので、読者にも伝わる形でその見解を明らかにして貰いたかった。

また本書中では、山本作兵衛の炭鉱画が絵と文章とによって描かれている点をその特徴として強調する。しかし同様の手法は、絵巻物や錦絵、各種の図絵など、日本では前近代よりしばしば用いられてきた手法である。山本作兵衛がそれらの何に影響を受けていたのかという点にまで踏み込んだ説明・分析が期待される。

山本作兵衛の炭鉱画は、筑豊をはじめとする炭鉱に再び社会的な注目を集めることとなった。炭鉱画に描かれた世界、描かれなかった世界、どちらもあるであろうが、今後ともその解明が進むとともに、筑豊をはじめとする旧産炭地の現代的な発展の取っ掛かりになればと願ってやまない。末尾ながら、若輩者の好き勝手なコメントを御寛恕いただければ幸いである。

（弦書房、二〇一四年、一八〇〇円〔税別〕）